



とびだす!

KON-KON! おじゃまします

17

発行：認定 NPO 法人まちづくりスポット大津
住所：滋賀県大津市二本松1番1号ランチ大津京内
<https://machispo-otsu.net>

2025 年 7 月 29 日 (火) 多様なテーマから意見交換の場をつくる“つなぐサロン”として「生きづらさを抱える若者を支える地域をどうつくるか」を開催しました。

本企画には、子ども・若者支援に関わる活動（フリースクール、不登校支援、居場所づくり、子ども食堂など）に取り組んでいる団体、行政職員、社会福祉協議会、小学校教員、大学ボランティアセンター職員、民間企業や個人事業者等 23 名が参加し、活発に意見を交わしました。本紙にてその記録をご紹介します。



報告

生きづらさを抱える若者を支える地域をどうつくるか

話題提供者の紹介

キーノートスピーチ

原 未来 (はらみき) さん
滋賀県立大学人間文化学部 准教授

専門は教育学、若者支援。ひきこもり等を経験した若者が集うフリースペース（居場所）を中心に、現場活動と研究活動の双方を行う。一般社団法人 OMUSUBI、若者協同実践全国フォーラム理事。

地域の事例紹介

恒松 勇 (つねまついさむ) さん
特定非営利活動法人あめんど 理事

2004 年にあめんど保育園とフリースクールを設立。2011 年に NPO 法人あめんどとなり、学校になじみにくい子ども・若者支援に尽力。ダジャレ発想と小ネタで子どもに人気。海外経験も豊富。

地域の事例紹介

谷川 知 (たにかわとも) さん
一般社団法人異才ネットワーク代表理事 /
大津オルタナティブスクールトライアンプ代表

大手生命保険会社勤務時に企画や海外事業、営業に携わる。退職後は、配偶者の転勤のため、青森から広島まで各地転居生活。2014 年大津に住み始め、2018 年異才ネットワーク設立。2019 年大津オルタナティブスクールトライアンプ開校。

※発言者の敬称表記は省略します

はじめに一趣旨説明

まちスポ：まず、本企画開催に至る背景を説明します。まちスポ大津が開館してから 5 年経ち、この間地域で活動する様々な団体に会ってきました。また、まちスポ大津としてもフードドライブ活動等に取り組む中で、不登校支援や若者の居場所づくりは接することが多いテーマとなっていました。近いフィールドで活動されている方、何か力になりたいと思っておられる方がいる一方、情報不足や連携の弱さも感じていました。



そこで今回、地域の多様な主体が自分ごととし

て考え、それぞれができること、つながりながらできることを同じ場で考えられたらと思い企画しました。今回の企画共催団体である NPO 法人碧いびわ湖の村上悟さんからも本企画への思いをお願いします。

村上：碧いびわ湖は 3 年ほど前から休眠預金活用事業を通じて不登校支援に関わり、あらゆる子どもの育ちを地域全体で保障する動きを推進してきました。その中で、中学校卒業後の若者への応援の必要性にも気づきました。今回のテーマは喫緊の課題と認識しています。ぜひみなさんと一緒に考えられたらと思います。

▼ 話題提供者からの事例紹介

支援対象でなかった“若者”

まちスポ：初めに原さんから、若者の居場所のこれまでと若者が抱える問題について全体的な理解を深めるという趣旨でお話をお願いします。

原：本日はよろしくお願いします。まず若者支援の領域が形成される背景には、1990 年代からのフリーター・失業者増加、2000 年代

からのニートの増加など、社会から孤立・無業状態にある若者が増加し、若者層の生活困難が顕在化したことがあります。それまで若者は支援対象とされてきませんでした。



原 未来さん（滋賀県立大学人間文化学部准教授）

また、若者を所管する行政部署がほとんどなく、子ども・乳幼児期・学校教育後の支援が手薄となっている状況があり、不登校支援、障害者支援、青少年育成、地域づくりなど、多様な草の根団体が若者支援の担い手となっている現状がありました。

さらに、家庭や企業、学校等で若者を支える機能が弱まる中、そこからこぼれる若者を支え

る公共の仕組みが形成されてこなかったことも孤立、孤独を抱える若者が増加した背景となっています。そんな中で、不登校の子どものフリースクールが発祥とされる「居場所」は、現在、社会に広く展開され、自由な過ごし方を通じて若者が社会との繋がりを取り戻す場の一つとなっています。

居場所における課題として、“滞留”の問題が挙げられます。私自身は“滞留”という言葉はあまり好きではないので、“”（カックつき）にしています。例えば、居心地が良すぎて次のステップに進めない、寄り添うことが中心で出口が見えにくい、といったことが現場からもよく挙げられます。また、居場所の内と外（社会）の接続問題として、居場所の非競争的な価値観と、社会の競争的な価値観の乖離が、若者が社会に飛び込むハードルを高くしているという問題もあります。



そこで出口の課題へのアプローチとして、「半外地」の考え方があります。居場所と社会をつなぐ中間的な場、例えば学習サポートセンターなどを設けることで、徐々に社会への接続を促す場を設けているところがあります。大切なのは、出口ありきではなく、居心地の良い場を維持しつつその人の世界観が狭まらないように、居場所を起点として生活圏を広げていく（＝生きられる場を広げる）視点が重要だと思います。

まちスポ：続いて恒松さんからは、団体に通う子ども・若者の話や、どのような課題があり、支援の必要性を感じているか、団体として今どんなことに取り組んでいるかという視点でお話をさせていただきます。

就労まで一体となった居場所支援

恒松：みなさん、こんにちは。NPO 法人あめんどでは、前身となるあめんど保育園とフリースクールを設立した時から、発達障害や様々な理由で学校になじみにくい子どもの居場所づくりに取り組んできました。

あめんどの活動理念は、「安心できる、成長できる、活躍できる居場所づくり」です。ちょうど居場所の滞留問題が課題となっていますが、私たちは居場所を積極的に活用することで、不登校支援、子どもの貧困や体験格差へのアプローチ、居場所活動や就労準備支援などに取り組んでいます。貧困の連鎖を断ち切ることを活動目的とし、経済的貧困だけでなく、

教育環境、能力、人間関係、生活のしづらさの連鎖に着目し、食料支援や学習支援、居場所事業等の実施を目指しています。



恒松 勇さん
(特定非営利活動法人あめんど 理事)

特に中学卒業後、制度の狭間で孤立する15歳からの若者たちへの支援については、まだまだ課題を感じています。そこで、教育・福祉・就労支援が一体となった居場所支援として、学習の学び直し、就労体験、相談の一元的な提供を検討しています。

スモールステップ型の就労体験・準備支援では、アルバイトや一人での就労が難しい若者に対し、履歴書作成、面接、休憩時間の負担軽減などを考慮した、ハードルの低い就労体験の場を設けています。「一人前シェアリング」という取り組みを試み中なのですが、一つ目は「3個1就労」です。1人分の仕事を3人に分け、報酬も3等分することで、時間的・精神的・体力的な負担を軽減し、自信をつけていくことを目的として考えています。例えば旧大津公会堂の日常清掃や滋賀リビングの広告折り込みと配布など1人1～1.5時間4,000円分の仕事を3で割ると1人当たり1,000～1,400円報酬が受け取れます。

二つ目は若者の得意分野、例えばイラストや音楽などの作品を、周りの手を借りて商品にして販売する「商品化ラボ」を構想しています。三つ目はまだ構想段階ですが、若者が地域の住民を呼び込んで運営する「居場所カフェ」です。社会にチームで送り出す、社会に商品を送り出す、社会を自分たちの居場所へ招き入れるという3パターンで人との繋がりをつくっていければと考えています。

好きや得意を活かした支援

まちスポ：続いて、谷川さんから同様の視点で、団体として取り組んでおられることについてお話をお願いします。

谷川：トライアンフは、不登校の子どものために週4回開所しているフリースクールです。安心安全な居場所でありながら「好き」や「得意」を中心とした学びからエネルギーをチャージして自らの学びへ進み、社会とつながることを意識しています。

利用者は小～高校年代の不登校の子どもで、なかには学習障害などの特性上の課題をもち

学校に行きづらくなった子どもや不安が強い子ども、特定の分野に集中して取り組むが興味のないことはしない子どもなど様々な子どもたちがいます。社会との接続への具体的な取り組みとしては、①カフェ・アンビシャス（大津市市民活動センターで子どもたちが自家焙煎コーヒーをドリップ販売。プチ就労体験として、役割分担やお客様との関わりを学ぶ）、②絵画展（美術館や銀行ギャラリーでの展示。自分の作品が社会で評価されることで、社会との繋がりをを感じる。海外展示も経験）、③マルシェ（年に1回、自分の「好き」や「得意」を発表する場を設ける）などがあります。

保護者の課題と支援としては、不登校や子どもの特性理解の難しさ（特に学習障害など）があります。保護者の不安や思いを受け止めるため、例えばLINEなど、いつでも相談できる体制をつくったり、送迎の際に立ち話であっても少しお話をしたり、一筋縄ではいかない子育てと一緒にやっという姿勢でいようと思っています。大切にしていることは、本人の納得のいく出口への支援です。社会とつながる出口を重視し、体験学習を積極的に実施しています。「普通」のタイミングにこだわらず、個人に合わせたペースで出口を見つけることが重要だと思います。



また、体験活動も重視しています。自衛隊見学やコンピュータ専門学校でのeスポーツ体験など、若者の興味から社会との接点を作り、将来を具体的にイメージできるようにしています。進路については、通信制高校を選ぶ子どもが多いです。本人が卒業できる高校を選ぶこと、信頼関係を築いた上で進路を指導することが大切です。



谷川 知さん
(大津オルタナティブスクールトライアンフ 代表)

▼ 話題提供者への質問とコメント

つながりにくい若者どうつながるか

Q. 居場所に繋がりにくい若者、家庭へのアプローチについて教えてほしいです。例えば学校

や行政と連携して繋がっているのか。アウトリーチ等何かされてることあれば教えてください。

A. 恒松：アウトリーチは人手の問題もありますが、必要性は感じています。小中学校の連携は学校や先生によって対応も様々です。情報を共有できたりする学校もありますが、守秘義務の関係で難しいところもあります。大津市教育支援センターは、小中学校とフリースクール等との連絡会議を通じて連携を進めています。

若者を育てた受け皿はどこへ…

Q. 昔は青年団があり、若者を育てるという意味でその役割は大きかったのではと思います。今は解散などしてなくなってきているので、そのような流れも含めて“公共で育てる場所がなくなった”、という捉え方でよいでしょうか。

A. 原：まず、青年団は地域差があるように思いますが、高齢化や若年層の加入者減少で解散してしまったところも多いのが現状です。以前は、地方から出てきた若者はすぐに就職していく流れがあり、孤立状態で地方から来た若者を組織として支えるような勤労青少年ホームがありました。ただ、時代の流れと共に進学率が上がると若者は学校教育機関に所属するようになり、地域に若者層が出て行かなくなり、勤労青少年ホームはほとんど潰れてしまいました。京都や札幌の一部でユースセンターのような形で若者層を支える機能を持った場が残っていますが、ごく少数です。このような流れも支援の空洞化が進んだことに繋がっています。



いろんな場所を居場所にできるか

Q. お寺や地域の信用金庫等が場をオープンにすることで居場所を増やしていけるのではと思いますが、そのような取り組みの例はありますか。

A. 恒松：信用金庫については存じていませんが、お寺の居場所は全国にもきっと良い例があると思います。近くの学区ではあるお寺の住職が居場所の提供を望まれましたが、子ども食堂の運営側が、檀家との関係や貴重な置物を破損する可能性を懸念して、継続的な開催の実現には至りませんでした。他に、「おてらおやつクラブ」という団体は、お寺へのお供え物

を、支援団体を通じて必要とする家庭に届ける活動をしています。

A. 原：若者がボランティアで境内の落ち葉を清掃する活動をしているお寺もあります。若者支援の取り組みに関心を寄せてくださる場所も多くあると思うので、そういったところにどう関わっていくかを考えられたら良いと思います。

支援の形としては、理解してくれる人と繋がり、社会をつくっていくことが大切だと感じています。居場所の形としては、大きい団体が一つあるのではなく、地域に小さな居場所がたくさんある方が良いと思っています。そうすることで、それぞれにとって居心地の良い場所ができています。



多様な特性をどう受け止める？

Q. 障害のある人、生きづらさ、働きづらさを抱える人の居場所支援、就労支援をする場合、当事者の特性への配慮はどのようにしていますか。いろんな方がいろんな関わりを持ってほしいという思いはありますが、集中してやりたい方と賑やかにやりたい方が同じ空間にいることが難しい場面もあります。様々な特性を持った方が共存する中で何か工夫されていることはありますか。



A. 谷川：トライアンプでは、子どもが集う場所を緩く区切って、子ども同士が距離をとったり縮めたり、自分自身で選択できるようにしています。同じ空間で過ごすことが苦になる場合は、やはり環境調整としてお互いがうまく付き合えるような場をつくることは大切だと思います。



▼ バズセッション—小グループで意見交換

近くに座っている人たち3人程度で、これまでの話を聞いて感じたことを意見交換してもらいました。

▼ 会場からのキーワードで議論を深める

バズセッションの時間に出たキーワードをもとに、さらに意見交換をしました。整理して紹介します。

支援への「入り口」と「繋がり」

■ 認知度向上と情報共有：子ども食堂やフリースクールの活動は増えているが、まだ知られていない現状がある。保護者や関係者がどうやって繋がるか、どう出会うかが課題。

■ 支援への抵抗感：多くの人が自己責任論や他者に迷惑をかけたくないという思いから、福祉的な支援を受けることに抵抗を感じる。

■ 支援感を感じさせないアプローチの必要性：物理的支援（食料など）を助け合いの形にしたり、福祉用語を避けたりするなど、受ける側の気持ちに配慮した支援の形が重要。



■ 要求応答型支援からの転換：困り事を表明しなくても、自然と支えられるような関係性や場づくりが求められる。そのためには専門家が配置される場だけでなく、多様な繋がりが生まれる場が重要。

■ 対象の柔軟な拡大：特定の困りごとを抱える人だけでなく、全ての若者が関わられるようなオープンな場（子ども食堂など）が、結果的に支援が必要な人との出会いの場となる。

若者の成長と「出口」の不安

■ 中高生以降の所属先の不安：居場所に繋がっている若者が、中学校卒業後に所属先がないことへの保護者や支援側の不安が大きい。居場所の活動を続けているとこれを課題と感じている団体は多い。



■ 繋がり続ける場の重要性：「出口」ありきではなく、居場所が「繋がり続けられる場所」として機能することにも強みがある。生活圏が狭くならないよう、居場所を中心にしながらも、

地域や社会へと世界が広がっていく関係性が理想的。

■ 納得のいく出口の実現：個人のペースや特性に合わせた多様な進路や居場所を見つける支援のあり方が重要。

団体の運営継続と課題

■ 寄付への依存と助成金の単年度性：NPOの運営は寄付や助成金に頼る傾向が強く、特に単年度の助成金では継続性が課題。休眠預金のような複数年助成も、その後が不安材料となる。

■ 人材確保の難しさ：対人支援の性質上、ボランティアだけでは限界がある。賃金面では十分な給与が払えない団体が多いため、志のある人材を確保・維持することが困難。



■ 企業連携・寄付：CSR活動に積極的な企業への働きかけ、個人からの寄付が増えるよう声をかけることに注力する（損金算入・所得控除のPR）。諦めずに伝えることが大切。

■ 行政との連携の課題：若者支援における行

政の担当部署が少なく、フリースクールへの直接支援が不十分な現状。

■ 広報の重要性：活動の認知度を高め、共感者を増やすことで、寄付や事業からの収益に繋がる可能性がある。

地域づくりのアプローチ

■ 多様な居場所の存在：地域に多様な質の居場所が多数存在することで、それぞれの人にとって居心地の良い場所が見つかりやすくなる。

■ 理解者の増加：若者支援に関心を持つ人、理解してくれる人を地域で増やしていくことが重要。専門家でなくても、個々の人が理解者となるネットワークを広げる。

■ 「公共」としての若者支援の確立：若者支援は個人の善意や志に頼る活動ではなく、社会全体で支えるべき「公共」の領域であるという認識を広げる必要性。

まとめと今後の展望

共感者と小さな居場所を増やそう

最後のまとめでは、若者支援においては、特定の個人や団体が孤立してがんばるのではなく、地域全体で多様な繋がりをつくり、地域で小さな居場所をたくさんつくるのが不可欠であるということが再確認されました。小さな団体や個人の活動が、専門家でなくとも地域の人同士をつなぐハブとなり、地域全体の支援力を高めていくことができます。



特定非営利活動法人碧いびわ湖
代表理事 村上悟さん



まちづくりスポット大津 代表理事 阿部圭宏からも
コメントを添えて閉会

今回の企画でキーワードとしていた生きづらさを抱える若者を地域で支えるためには、地域の“普通の人たち”の理解者を増やしていくための発信と対話の場が継続的に必要であるということが確認される時間となりました。

開催日：2025年7月29日（火）

アンケートの声から

半外地という概念、出口を探すのではなく生きられる場を広げていくということ、福祉のカラー、福祉のイメージへの対応の話など、現場では感じわかっていていっても言語化して理解することができてよかった。

子ども食堂の中でも学校に行きづらい子、生きづらい子たちもいるので真摯に向き合えるように、いろいろなケースをみたり、情報交換できる場に出向いていきたいと思いました。

参加者同士の交流から生まれる相互作用、気づきがとてもワクワクしました。

今のつながりが大事で、その繋がり続けることが大切だと思いました。

様々な業種の方がおられましたが、みなさん、何かしたい、何か始めたいという思いをもっておられたことがとても印象的で、自分の立場で何ができるのかということを考えていきたいと思いました。

それぞれが持っている情報や素材、経験をシェアしてつながるプラットフォームがあれば良いなと強く思いました。

そこに居続けていていいのかと迷うこともあります。その居場所がいつでも本人の安心できる場所としてありながら、「居場所」を広げていくということが大切なことだと感じました。

小さくても良いので拠点を持ちたい。それに向けて、関係者だけではない『普通の人たち』との接点を大事にして思いを伝える機会を増やしたいと思います。

開催概要

日時：2025年7月29日（火）13:15～15:45
主催：認定特定非営利活動法人まちづくりスポット大津
共催：特定非営利活動法人碧いびわ湖
後援：滋賀県フリースクール等連絡協議会

まちづくりスポット大津の活動

- ◎ 活動の人育ちを応援（講座など）
- ◎ 情報収集・発信
- ◎ 相談・コンサルティング
- ◎ 「ハッシュタグ大津京」運営
- ◎ 交流・ネットワーキング事業

■ 誌面に関するお問い合わせ

認定特定非営利活動法人まちづくりスポット大津
〒520-0021
大津市二本松1番1号ランチ大津京内
MAIL: info@machispo-otsu.net
https://machispo-otsu.net
TEL: 077-511-9814
FAX: 077-548-6758

